大分合同新聞　記者の思いを読み取ろう

ワークシート　年　組　名前

記者走る
つれづれ日記

羽山草平

「前の人は座れ！　後ろの人が見えないぞ」―。豊後高田市の伝統行事「天念寺修正鬼会」で、地元の男衆がマナー違反を続ける見物客を注意し、たいまつでたたいた。

寺の講堂は数百人の見物客ですし詰め。火の粉が舞い上がり、その客だけでなく、周囲にいた人も大慌てで振り払う。「そこの人、服が焼けてるよ」。私の友人は知らぬ間に上着のフードに火の粉が入って、気付いたら煙が上がっていた。

見物客の男性(72)＝同市＝は「たいまつでたたかれ、怒られるなんて理不尽だろ？　祭りってのはその理不尽さがいいんだよ」と愉快な様子

「理不尽さ」は祭りの妙味

だ。男衆の荒々しさが祭りを盛り上げているのは間違いない。

私もたっぷり煙と火の粉を浴びた。カメラに染み付いたすすの臭いは当分残りそうだ。この「理不尽さ」を多くの人に体験してもらいたい。

（豊後高田支局）

（2017年2月9日付朝刊県北面）

① 前半の二つの段落を読んで、何が理不尽なのかをまとめましょう。

悪いのはマナー違反の見物客なのに、友人にまでたいまつの火の粉が飛んできて煙が上がったこと。

② 理不尽なのに、なぜ「いい」のでしょうか。記事から想像してみましょう。

怒る荒々しさが盛り上がりにつながっており、祭りが雰囲気も含めて地域の伝統としてコミュニティイーを結び付けているから。

③ この記者は祭りについてどう感じていますか？想像してみましょう。

カメラににおいが残っても心地よさを感じ、多くの人にまつりを体験してもらいたいと感じている。